

(イ) オキナワモスクについて

1964年頃から本県の沿岸漁業で重要な位置をしめるまで発展してきたオキナワモスク *Cladosiphon* ^{*okamuraanus*} ~~*tomentaria*~~ は波浪の少ない浅海域に生育して2月から5月にかけて採採される。1969年～1971年間のモスクの生産量と生産額を示すと次表に示す通りである。

表8 県内におけるオキナワモスクの生産量と生産額

年	生産量 (kg)	生産額 (円)
1969	436,921	6,315,480
1970	2,141,151	69,915,760
1971	2,190,990	146,089,440

(沖縄の水産業より)

これまでの経験的な観察からすると、モスクはホンダワラ類やイトアマミジ、リュウキュウスガモの植物と岩石、鉄パイプ、木のくい等にもよく付着することが知られているが今回の調査でさらに基礎的な知見を得た。すなわちこれらの着生基盤のうちで最も早く着生するのはリュウキュウスガモとベニアマモの古葉の先端部であった。時期は12月中旬に着生し始める、この時期は前述したようにスガモの葉が枯死する時期にあたる。古い葉の先端部で成長したモスクはスガモの葉が植物体から干切れるとモスクはスガモに着生したまま潮流により分散される形になる。これは自然界が行う合理的種苗分散の一形態かどうか追求したいと思う。このような現象はモスクの最盛期にあたる3月にも干潮時に沖合へ流れるのがみられた。

またこの干潟で最も早く着生した場所は白雲荘の近くにある舌状の藻場であった。その場所は図4に示すようにすぐ側に水路があり、潮の干潟により水流が生じやすい場所である。このことはモスクの遊走子の動きと潮流の間に密接な関係があることを示唆している。同じ場所でもスガモの葉上に広い範囲にモスクが着生成長してからサンゴ片や小石等にも着生するのが観察された。

マツバウミジグサはリュウキュウスガモやベニアマモに比べモスクの着生率はきわめて小さい。これは両群落の生育する場所の相違によるのが主な原因と思われるがさらに追求したい。

(ニ) 藻場とシラヒゲウニについて

夏期に水深約2～5mの比較的深い場所に生息するシラヒゲウニ *Tripneustes gratilla* が冬期に浅海域の藻場に移動する群がいることを確認した。1972年12月13日の調査で採取したウニの胃内容はイトクズグサが大部分であったのに対して、12月22日の調査で藻場の上から採取したウニは胃内容の95%以上、湿重量に対して平均14gもリュウキュウスガモを喰っているのが認められた。また数個体直接 grazing しているのを観察した。これまでシラヒゲウニが顕花植物を直接 grazing したという報告はみえないのでこれは新しい知見であると思われる。

これまで漁貝類の産卵場としての役割の他はあまり重要視されなかった水生顕花植物がシラヒゲウニには重要な食藻の一つであることが確認された。冬期のその他の食藻としてはア